

平成 20 年度「東北大学学校ボランティア」活動報告

——「大学生にとっての教育効果」と「組織運営の課題」の再検討——

石田 賢示

東北大学学校ボランティア事務局代表
東北大学教育学部

本報告では、「東北大学学校ボランティア」(以下、学校ボランティア)の平成 20 年度の取り組みを報告する。昨年度までの報告では大学生による社会体験活動の教育効果と学校ボランティア事務局組織の自主的運営に関する課題を検討していた。本年度は、教育効果と考えられることがらを相対化し、かつ自主的運営に関する課題とされたことがらが以前よりもどれだけ改善された(されていない)のか、今年度の事業を通じて生じた新しい問題は何か、について検討する。学校ボランティア、および学校ボランティア事務局での活動が、学生にとっての学習の場として位置づけられるような努力が一層求められる。

1. 今年度の事業内容と概要

学校ボランティアの事業概要については過去の報告書¹などで言及がなされているため、今年度は詳細を記述しない。学校ボランティア事業の目的は、(1) 大学生によって地域の教育活動がより豊かになること、(2) そこでの活動を通して学生が社会の一員として成長していくこと、の 2 点にもとづく²。仙台市立の学校については仙台市教育委員会、それ以外については各学校や宮城県教育庁から活動の依頼が学校ボランティア事務局に知らされる。学校ボランティア事務局は、活動概要を登録学生に通知し、参加希望の申し込みがあった場合、活動開始までの手続きを行う。活動開始後も、定期的に活動学生と連絡をとり、学生の側に無理な負担が生じていないかなどを把握している。

以下、今年度の学校ボランティアの構成と概要を記す。

1-1. 登録学生の構成

表 1 は 2009 年 3 月現在で学校ボランティアに登録している学生(学部生・大学院生・研究生)の所属別構成表である。登録学生の総数は増加している³。また、登録学生に占

¹ 平成 18 年度, 19 年度の「ボランティア事業報告」(東北大学大学院 教育学研究科『教育ネットワークセンター年報』第 7 号, 8 号)。

² 水原克敏・渡利夏子, 2006, 「「大学生による学校参加ボランティア・プロジェクト」の実践報告」『教育ネットワーク研究室年報』第 5 号, 東北大学大学院教育学研究科 教育ネットワーク研究室, p103.

³ 年度末には登録取消の意思を確認するメールを送付しているため、就職、他大学(院)への進学、および不通の学生は除かれているはずである。しかし、返信のない学生は「在籍」とみなしているため、総数が純粋に増加しているかどうかは正確ではない。

める教育学部・教育学研究科以外の学生の割合が50%近くである。実際に活動する学生も教育学部以外の割合は小さくない。これは、本組織が全学に開かれていることによる。学生の登録動機として、教員志望だからというものが多い。しかし、実際に活動している学生の参加動機は必ずしも教員志望にもとづくものではなく多様である。

表 1：登録学生の構成表

所属	18年度	19年度	20年度	前年度からの差	20年度構成比(%)
教育学部	65	89	114	25	49.1
理学部	15	27	30	3	12.9
文学部	22	25	28	3	12.1
工学部	11	11	14	3	6.0
法学部	11	10	9	-1	3.9
教育学研究科	12	8	7	-1	3.0
情報科学研究科	6	7	5	-2	2.2
経済学部	2	4	4	0	1.7
国際文化研究科	2	3	4	1	1.7
医学部	2	2	2	0	0.9
教育情報学	欠損	2	2	0	0.9
工学研究科	3	7	2	-5	0.9
農学部	2	2	2	0	0.9
不明	欠損	欠損	2	欠損	0.9
文学研究科	2	3	2	-1	0.9
環境科学研究科	2	1	1	0	0.4
経済学研究科	1	1	1	0	0.4
歯学部	0	1	1	0	0.4
農学研究科	欠損	欠損	1	欠損	0.4
薬学部	1	1	1	0	0.4
合計	159	204	232	28	100.0

1-2. 今年度の活動数と実際に活動した学生

232名の登録学生のうち、今年度実際に活動した学生数は22名である。昨年度の40名弱から比べると半数弱である。活動者数の割合が低いことはこれまでからも続いている課題である。

この傾向は、学校ボランティアの活動を学生に周知する方法に起因する部分がある。ポ

ランティア事務局は、毎年度全学教育の担当教員の先生にお願いし、授業終了後などに登録用紙を配布して、学生に任意で提出してもらっている。また、活動参加の申し込みも任意であり、事務局から特定の学生に依頼することはない⁴。登録後、こちらから何らかの働きかけがほとんどない、あるいは学校ボランティアの動きが見えにくいことが、活動から学生を遠ざけてしまうのかもしれない。

この点は学校ボランティアの運営上の課題であるが、最近の活動依頼では、中長期的な学生の関わりを求める学校が多いということも特徴である。気軽に登録した学生にとってみれば中長期的な活動は敷居が高いが、学生を受け入れる学校にとってみれば、学生があまり流動的であることを望まない。このような点も、活動率に影響するものと考えられる。しかし、このことは同時に活動率が高ければよいとは一概に判断できないことも意味している。ボランティア事務局としての改善課題として活動学生数を増やすことは重要であるが、あくまで学校ボランティアの目的に沿うことが前提となるであろう。

1-3. 今年度の学校ボランティア

今年度は例年と異なり、仙台市教育委員会の指導主事の先生による説明会が6月に実施された⁵。そのため、例年よりも活動のスタートが遅かった。例年、5、6月の時期に活動依頼が多く寄せられるため、今年度は多くの活動に間に合わないということもあった。

また、1-2にも記したが最近は期間が半年から1年間にわたるような活動(と活動依頼)が増えてきたため、9月以降は依頼がほとんどなかった。なお、今年度学校ボランティアに寄せられた活動依頼数は16である(うち学生が参加したのは8)。

2. 今年度の学校ボランティア活動内容報告

以下、今年度の活動内容を報告する。活動学生からの報告が得られたもののみここでは記載するが、学校ボランティアのウェブサイト上でも、記録を整理して順次公開していく(2-1、2-2は石田、2-3は花田佳菜子、2-4は阿部友幸、2-5は畠山祥史、2-6は高橋龍が担当している)。

2-1. 仙台市立第二工業高等学校

【活動時期】2008年4月14日～2008年4月25日(ゼロ時間目)

【活動者】1名(教育学部4年)

【活動場所】仙台市立第二工業高等学校

【活動内容】新入生の数学補習での補助

⁴ 今年度は、仙台市教委を通じて前年度活動のあった学校から、可能な程度で前年度活動した学生に「今年度も」というお願いが寄せられることがあった。

⁵ 例年は4月の下旬～5月上旬に実施されている。説明会の実施後に、教育委員会から活動依頼を受けることになる。

【感想・意見】

新入生が高校の生活に入りやすくなるように、また新入生の数学の理解度の確認も兼ねて実施されていた補習に参加させてもらった。活動時間の多くは数学担当の先生と共に過ごしていたことや、補習の時間帯しか都合がつかなかったこともあり、生徒と直接会話をすることはそれほど多くなかった。だが、こちらの予想とは異なり、気軽に接してくれる生徒が多かった。職員室でも先生方とお話しする機会を持つことができ、有意義な経験だった。

活動を通して、新入生の数学の理解度のバラツキが大きいことがよく分かった。その一方で、工業系の高校であるため実習等に関連するものは、高度な数学（微分積分など）が含まれていても自然と身につくという先生のお話も興味深かった。自分が勉強していることの意味がある程度明確であれば、勉強（学習）を続けることにつながるという点は、思い返せば自分自身の統計学や専門分野などの勉強と同じである。勉強の意味は人それぞれ違ってよいと思うが、何かの意味付けができる、あるいはそれについて考えるきっかけや環境に触れられるかどうかは重要なことだと思った。

2-2. 仙台市立富沢中学校

【活動時期】2008年7月19日、26日、8月2日、23日、9月13日、27日、10月4日、25日、
11月1日、8日（午前9時～午前11時30分）

【活動者】5名（理学部3年、工学部2年、文学部1年、農学研究科M1、教育学部4年）

【活動場所】仙台市立富沢中学校

【活動内容】中学校3年生を対象にした「土曜寺子屋」（自学自習の補習教室）での学習指導

【感想・意見】

- ・ 生徒たちが積極的に質問してくれたので、こちらもコミュニケーションをとりやすかった。また、生徒はみんな素直で楽しかった。
- ・ 他に宮城教育大学の学生さんと一緒に活動したが、学生同士でも協力し合って活動を楽しむことができた。保護者の方からのお礼のお手紙や、生徒たちからのお礼の寄せ書きを頂いたときには、自分の活動が何かの役に立てたのだという感覚を持てた。
- ・ 先生方が非常に親切にしてくださった。また、学生である我々にも「今後どのようにしていくとよりよい形になるか」といった質問を積極的に求めてきてくださり、コミュニケーションをとることができたのでよかった。
- ・ 活動を重ねるにつれて、生徒同士で教えあうような場面も多くなってきたのには感心した。自分が生徒の学習にどれだけ貢献できたかは分からないが、時間が経つにつれて生徒の自発性が高まっているような気がした。
- ・ 毎回楽しく通うことができた。先生方が、寺子屋を単なる学力向上のプログラムとして捉えているのではなく、地域の人たちや富沢中出身の高校生、大学生も巻き込んだ

プロジェクトにしていきたいという大きなビジョンを抱いていることに共感できた。
これからも、機会があれば是非参加していきたい。

2-3. 仙台市立八幡小学校

【活動時期】2008年7月～2008年12月（各月1～2回、水曜日放課後）

【活動者】3名（工学部4年、教育学部3年、教育学部3年）

【活動場所】仙台市立八幡小学校

【活動内容】5・6年生の放課後算数教室

【感想・意見】

- ・ 八幡小学校には元気な子がいっぱい、自分が落ち込んでいるときも小学生からたくさん元気してもらいました。算数教室でも活発に質問をしてきてくれました。こちらにもそれに応えようと真剣勝負で算数教室一回一回が新鮮でした。ぜひ、また機会があれば参加してみたいです。
- ・ 活動を通じて、算数の問題に取り組む子どもたちの真剣な様子を見ることができいい刺激をもらいました。テストやプリントの間違った問題を直して持ってくるときに、今度はできているはずだという自信満々の顔をしていたり、答えが合っているかなと不安げな様子で見せにきたり、わからなくて固まっていたりなど子どもの様子はさまざまでしたが、わかったとき、丸をもらったときの嬉しそうな顔やほっとした顔が印象的で、毎回楽しませていただきました。うまく説明してあげられずに1問に苦戦させてしまうなど反省もありましたが、教室に行くたびに、自分もがんばらなければと勇気付けられ、有意義な時間を過ごすことができました。
- ・ 今年は学生ボランティアの参加者が少ないということもあり、昨年までの活動と形態は少し変わり、個別指導という形が主体となりました。しかし、分からないところがあると他のみんなも私たちに聞きに来てくれ、最終的には学年の子供たちみんなと関わることができ、とても有意義な時間を過ごせました。

2-4. 仙台市立東二番丁小学校

【活動時期】2008年10月～2009年3月（月曜と木曜の週2回、1回2時間程度）

【活動者】1名（教育学研究科M1）

【活動場所】仙台市立東二番丁小学校

【活動内容】特別支援学級での国語や算数、図工、体育等様々な科目の指導。

学級の児童は2人で、担任の先生と分担して児童の個別指導をするというのが主な活動。

【感想・意見】

活動に慣れるまでは児童とどのように関われば良いのかわからず、戸惑うことが多かつ

たです。そのような中でも、色々な活動をしていくうちに児童の特徴が分かってきたことと、担任の先生の児童に対する接し方から学んでいくことによって、どのように活動していけばよいか少しずつ考えて活動できるようになっていきました。来年度も継続して活動する予定なので、児童や先生との信頼関係をさらに強いものにしていけるように毎回の活動を大切にしたいです。

2-5. 仙台市立通町小学校

【活動時期】2008年6月～2009年3月（活動者の都合に合わせた日程）

【活動者】3名（理学部2年，教育学部4年，教育学部1年）

【活動場所】仙台市立通町小学校

【活動内容】1年生の担任の先生の補助（机間指導，授業以外での児童への対応，プリントの丸付け）

【感想・意見】

先生方も忙しいようで、私は指示をされたことももちろんしていましたが、基本的に担任の手が行き届いていないところを見つけては様々なことをしていました。一番は授業中の机間指導です。児童は自分のことが終わればすぐに先生の所へ行き、自分のやったことに対して評価を欲しがります。内容によっては先生一人では対応できません。しかし、担任が「加苗先生に見てもらってね」と言えば、私に対しても評価を求めてくるので、その点で先生の負担を軽減することはできたと思います。

月曜日は休み明けなので「児童がとても元気」です。落ち着きがなく、何か必ず事件が起きてしまいそうで、私も緊張感を持ちつつ活動をしていました。

半年ほど活動をしてみて、1年生は本当に成長するスピードが早いと感じました。11月、初めて児童たちに会った時はまだ、彼ら自身が自分のことに精一杯で、周りの友達を見る余裕がなかったように思えます。しかし最近では、「○○ちゃんがかわいそう」「○○くんはいつも先生に怒られてるから」など、周りをよく見た発言が多くなってきたと感じています。

何に対しても一生懸命で、ひたむきに取り組み、時に自分の思いを主張する彼らに、日々感心するばかりでした。そして、それを受け止めている先生方が、教師を目指す私の（一つの）目標にもなりました。

次年度も都合さえつければ、この活動をしていきたいと思います。

2-6. 仙台市立上杉山中学校

【活動時期】2009年1月29日，2月18日

【活動者】1名（文学部3年）

【活動場所】仙台市立上杉山中学校

【活動内容】

①放課後の学習補助・話し相手

—2年生の生徒の英語の予習を手伝う，一緒に話をする。

②特別支援学級の授業補助

—英語の授業でのアシスタント。

【感想・意見】

今回は学習補助という形の活動が主だったのですが，その中でも，子どもたちと触れ合うことの大切さを実感しました。皆初めは緊張していたようでしたが，徐々に話しかけてくれるようになっていったので良かったです。特別支援学級の子どもたちも，とても生き生きと学習に取り組んでいたのも，私も一緒に真剣に取り組むことができました。また，先生方の子供たちへの声かけの仕方など，多くの場面で勉強になりました。今回は，インフルエンザの流行による学級閉鎖などで，あまり活動できなかったのが残念でしたが，これからも今以上に積極的に子どもたちに声かけできるように，心がけていきたいと思えます。

3. 教育効果の再検討

2. で掲載した活動報告の内容をもとに，学校ボランティアを通じた大学生にとっての教育効果について再検討する。過去の報告では（1）異年齢集団とのかかわりによる効果，（2）社会人としてのマナーの定着，（3）予期せぬ事態への柔軟性，（4）簡易な教育実習としての効果，などが期待できるのではないかとされている。

もちろんこれらの効果は（事務局スタッフとして思うには）経験的に期待できる。また，学校ボランティアの目的の1つである「学生が社会の一員として成長すること」という点にも適っている。それでは，これらは学校ボランティアのオリジナリティとしてアピールできるといえるだろうか。

（1）から（3）は，サークルやアルバイトの経験などを通じて期待できる。さらに，これらは大学生でなくとも社会の中では一般的に求められる資質である。（4）については活動内容によるところが大きい。日常的な授業に参加するような活動では教育実習としての効果のある程度期待できるかもしれないが，課外活動ではそれほど期待できないのではないかと。少なくとも，教育実習に準ずる効果が期待できると一般化するの難しい。

学校ボランティアでの活動を通じて，大学という場や，大学（院）生であることを活かして社会の一員として成長することはできないだろうか。（1）～（4）の効果への期待に加えて，本年度の報告では新たに（5）自発的な観察と活動の相互作用，を挙げてみたい。

アルバイトやサークル活動などで割り当てられた役割は，しばしばルーティン化する。また，教育実習では教育実習生らしく振舞うことが求められよう。ルーティンや役割期待

は、自分の行為を自明化する。それによって、自分が今何をしているのか、それにどのような意味があるのか、などを考える契機を逸しやすくなる。

学校ボランティアの一つの特徴は、活動毎に学生が観察者としての視点も持っていることである。観察者の視点を持つことで、活動を振り返り、よりよくするにはどうすればよいかについて考える頻度が増えるようである。「基本的に担任の手が行き届いていないところを見つけては様々なことを」という通町小学校の参加者のコメントや、「色々な活動をしていくうちに児童の特徴が分かってきたことと、担任の先生の児童に対する接し方から学んでいくことによって、どのように活動していけばよいか少しずつ考えて活動できるように」になったという東二番丁小学校の参加者のコメントは、観察と活動のフィードバック関係を表しているといえる。

確かに、誰かに指示される方がより効果的で効率的な方法を素早く知ることができるかもしれない。だが、ボランティアの効用は別のところに見出される。たとえ時間がかかったとしても、活動とその意味の関係を自発的に考えることで、次の活動へフィードバックされていくのではないか。こうした行為が具体的な個々の活動を越えて学業や研究、就職活動、さらには仕事を含めた日常生活に活かされることで、「大学生らしく社会の一員として成長した」といえるのではないだろうか。大学生活は時間をかけて自発的に何かをやり遂げられる数少ない環境である。学校ボランティアが、その環境を構成する一つの場として利用されるような工夫を考え出してゆく必要がある。

4. 組織運営の課題の再検討

学校ボランティア事務局は、学生有志からなるスタッフにより、教育学研究科の水原克敏教授を顧問として運営されている。日常的な仕事は学生が自主的に運営している。

昨年度からの課題として、事務局メンバーの規模が大きくなったことによる情報共有の難しさが挙げられていた。今年度でも、この点が解決されたとはいえない。さらに、今年度は新たに10人の学部1年生が事務局スタッフとして参加した。その一方で、経験のある多くの事務局メンバーが卒業・修了し、事務局の仕事を理解しているメンバーが極端に少なくなった。

3. で記したことは、事務局を学生が自主的に運営することの意味にもつながるはずである。しかし、今年度は事務局の仕事の多くがルーティン化してしまったように思われる。効率性の観点からは、経験のある3、4年のスタッフが手早く仕事を済ませてしまえばよい。だが、事務局運営を学習の場として位置づける意味では、(失敗を繰り返してでも)1年生スタッフにより多く仕事を任せるべきであったかもしれない。

また、昨年度「学生サポートセンター」の「学生ボランティア助成事業」より受けた10万円の助成金についても再考が必要である。学生の活動に伴う交通費の問題が解決できるのではないかと期待していたが、助成金による活動者数の増加はなかったといえる。この

ことから、登録学生が活動に参加しない理由は、必ずしも金銭的問題にはよらないのではないかとも考えられる。1-2 で述べたように学校ボランティアに動きを出す（ウェブサイト運営を充実させる、広報活動を活発にするなど）ことや、「学校ボランティアだからこそできること」のプレゼンテーションを積極的に行う努力が必要なのではないか。元々助成金は交通費支給という名目であったが、学校ボランティアの活動振興という点で有効利用するという事も考慮していかなければならない。

事務局メンバー自体が若返ったことで、これまでにはなかったような視点での運営も、今後可能になるかもしれない。しかし、これまで蓄積してきた課題の認識や問題解決の方法が共有されにくいという新しい問題も生じてきた。また、これまで指摘されてきた課題のほとんどは課題であり続けている。事務局運営が学生の成長につながるような工夫も考えていかなければならないだろう。